

Title	ラドイツ批判
Author(s)	穂積, 文雄
Citation	經濟論叢 (1956), 77(1): 80-97
Issue Date	1956-01
URL	http://dx.doi.org/10.14989/132456
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

經濟論叢

第七十七卷 第一號

住民税の問題點……………	神戸正雄…	(1)
資本主義より勞働主義へ……………	作田莊一…	(14)
ケインズの一般理論について……………	柴田敬…	(33)
中國農業金融の蹤跡……………	徳永清行…	(44)
アメリカ經濟管見……………	堀江保藏…	(63)
ラダイツ批判……………	穂積文雄…	(80)
恐慌と地代……………	鶴嶋雪嶺…	(98)
ベンサムの功利主義體系……………	山下博…	(113)

[昭和三十一年一月]

京都大學經濟學會

ラ
ダ
イ
ツ
批
判

穂 積 文 雄

ジンミイ「諸君はたたかつた。しかしながら、諸君は敵をまちがえていた。」——トルレル¹⁾

一九世紀のはじめ、イングランドにラダイツ運動が勃發した。ラダイツ運動の本質というか、いわゆるラディズムは「機械打ち壊し」にあるといえよう。その機械打ち壊しは労働者の機械に對する憎惡より發する。そして、労働者の機械に對する憎惡は、かれらが、機械をもつて、かれらの職をうばい、かれらの勞賃をひきさげ、かれらに不幸におとし入れるもの、とかんがえるによる。しからば、かれらの、かかるかんがえは、はたして、ただしいか。これに對しては異論がある。それでは、それは、いかにあるか。

まづ、機械は、それが採用されるところで、労働者の職をうばうことは、これをみとめるとしても、そのかわり、他のところで、その補償をする。だから、全體としてみれば、機械は労働者の職をうばうものではない、とすゝめ、みかたがある。いうところの補償説(Compensation theory)である。それも、一とほりではない。²⁾

1、あるものは、こういう。労働者から職をうばう機械は、同時に、必然的に、まったくおなじ労働者を使用するに足る資本を遊離する。けれど、機械が労働者の職をうばうとき、労働者は生活手段からきりはなされる。この生活手段は、職をうばわれたる労働者が生産的に消費しうるような投資がみつかるまでは、おちつくところがない。したがって、おそかれはやかれ、資本と労働者は再會せねばならぬ。そのとき、そこに、補償がなりたつ。

2、また、こういうかんがえかたもある。機械を採用することは機械の生産を前提とする。機械の生産には労働者が必要とする。このことは機械の採用によりて職をうばわれる労働者に對する補償となるであらう。

3、さらに、こう説くものもある。ある商品の生産に、機械が導入されると、その商品は安價になる。消費者はそれだけ購買力に餘裕を生ずる。その餘裕は他の商品にふりむけられる。そこで、その他の商品の、需要が増し、生産が大となり、そこに、労働力の需要がおこる。かくて、一部門における労働からのぞかれただけの雇傭が、他の部門の労働において補償される。

4、機械の導入により、ある商品が安價となれば需要が増大する。需要が増大すればその生産が盛んとなる。しかるに一つの商品の生産が盛んとなれば、それはそれだけでは終らない。そこにはおのずから関連産業がおこり、その殷盛が見られる。かくて労働力に對する需要は増大し、それは、さきの機械の導入によつて生じた労働力に對する需要の減少をおぎなつてあまりあるであらう。そういう考え方もおこなわれた。たとえばつぎのごとくである。

あたらしい機械の發明がもたらすもつともいじらしい富の例は、有益な書物を非常に廉價につくる機械のそれである。一四五〇年より以前にあつては、筆耕は高價な書物の富字をして、くるしい生涯を送つた。それは非常に多數の家族を便役し、これを扶養した。印刷術が發明せられると、たちまち、これらの筆耕はみな職を失つた。たしかに困窮の時期があつた。しかし、書物

の價格が下つたので書物がひろく賣れ、いくばくもなくして、この産業にやとわれる人、すなわち、植字工・印版師・製紙家・校正者・製本屋・書肆・呼賣子・運送人の數が非常に増大した。その數はむかしの筆耕の數よりも百倍も多いといつてあやまりではないはずである。筆寫で生活した千の家族のかわりに、今日では一〇萬の家族が印刷術で生活している。

マルクスは、「機械裝置は、それが採用される労働部門においては、必然的に労働者を驅逐するのであるが、しかしなお他の労働部門においては、雇傭の増加を呼び起すことがあり得る」といい、「一産業部門における機械經營が擴大されれば、まづ第一に、これに生産手段を供給する他の生産部門における生産が増大する」として、「これによつて、従業労働者數」が「増加する」ことをみとめ、「たとえば、綿紡績業の嵐の進撃が合衆國の棉花栽培を促進すると共に、アフリカの奴隸貿易を溫室的に促進したのみではなく、同時に黑人飼育をいわたる境界奴隸制諸州の主要企業たらしめたことは、全く疑う餘地がない」といつている。さらに、かれは、「ある労働對象が、その最終形態に達するまでに通過せねばならない餘備または中間段階を、機械裝置が捉えるならば、この機械製品が入つて行くところの、まだ手工業的または工場手工業的^{ファクトリー}に經營されている作業場の労働材料が増加すると共に労働需要も増加する」として、これをつぎのごとく立證している。

たとえば、機械紡績業が撚絲を低廉豊富に供給したために、手織工は當初は支出を増すことなくできるだけの時間作業することができた。かくして彼らの収入は増加した。したがつて、ジェンニー、スロツスル、ミュールの三紡績機によつて、たとえばイギリスに産み出された八〇萬の綿織物工が、結局再び蒸氣織機によつて減はされるまでは、綿織物業に人間が流入した。かくして、機械によつて生産される衣服材料が豊富になると共に、裁縫工、仕立女工、縫物女工等の數が、ミシンの出現するまで増加する。

5、なお、マルクスは、機械により、「労働者数が相対的に減少して、しかも生産手段及び生活手段が増加することは、運河、船渠、トンネル、橋梁等のように、その生産物が遠い将来にしか實を結ばない産業部門における労働の擴大に至らしめる。直接に機械装置に基づいてにせよ、或いはこれに對應する一般の産業變革に基いてにせよ、全く新たな生産部門と、したがつて新たな労働部面とが形成される」ことを指摘するほか、また、

6、「機械装置の直接の成果は剩餘價值と同時にそれが表示される生産物量を、したがつて、資本家階級とその眷族とが衣食する物質と共に、この社會層そのものを増大させることである。彼らの富の増大と、第一次的生活手段の生産に必要な労働者数の不斷の相對減少とは、新たな奢侈欲望と同時にその充足のための新たな手段を産み出す」として機械が奢侈品生産を増大せしめることをいう。生産が増大すれば、したがつて、そこに労働力の需要が増大し、雇傭が増大することはいうまでもあるまい。

7、機械による生産力の増大、よつて生ずる物品の豊富と、機械による働勞力の節約は、相合して「労働者階級のますます大きい部分を不生産的に使用することを可能にし、かくして、昔の家内奴隸を下男、下女、従者等の如き「僕婢階級」の名のもとにますます大量に再生産することを可能にする」¹⁰⁾

以上は、機械が採用されるところでは労働に對する需要が減退することをみとめるとしても論であるが、さらに、機械が採用されるところにおいても、労働に對する需要は減退せず、逆に増大し、雇傭が増加するとなし、したがつて、機械を打ち壊すことこそ、そこで、はたらいっている労働者の職をうばう所以であることを指摘するものさえある。その典型を、われわれはつぎの引用において見出すことができよう。

およそ商品はその價格が安ければ安いほどそれに對する需要が増し、買手はその商品がもつとも安く賣られる市場に行くであらう。そして、だから、價格を安くするのに役立つものは、なんでもみな、需要を増し、そのような價格の安い市場を、地方的な事情のために商品をそのように安い價格で賣ることのできない他のすべての市場よりも、有利ならしめる。需要の増すところでは、やとわれる人手の數も亦増すであらう。しかるに、機械の使用ほど製品の價格を安くするのに役立つたものは、いまだかつてない。機械によれば、同一の仕事が、ただに、よりすくない時間に、よりすくない人手で、なされるばかりでなく、さらに、すべての作業が肉體の力でなされねばならないときよりも、よりわかしく、より體格の強くない人達によつてなされることが可能となる。そこで、いまや、（以前のの場合のように）まつたく夫や父のはたらくにのみたよらないで——夫や父にもその力を用いて充分の賃銀を得る職場がなおたくさんある——一家全員がその家をささえることに貢獻することができることになる。そうすると、もし、不滿のやからの努力が機械の排撃に成功することができたとすれば、その結果はどうなるか？ 妻や子供は解雇せられるであらう。夫や父は、まつたく、自分達の勞働だけでかれらをやしなつてゆかねばならない。製品の價格はあがるであらう。買手は、機械の使用が奨励される市場に行つてしまふであらう。商業はすたれるであらう。製造業者はしだいにその職人を解雇したり、かれらの賃銀をひき下げたりするであらう。他方、かれらの家族はますます重荷となるであらう。そして、ついに貧乏と不幸のみがさかえるであらう。¹²⁾

また、トムソン男爵はヨーク城におけるラツダイツの公判廷において、

われわれの製造業の存在のよつてきたところは、おそらく、そして、その卓越・繁榮な狀態のよつてきたところは、たしかに、われわれの機械の優秀なことからである。およそ生産費を減すところのものはみな消費を、そして内外の市場におけるその商品に對する需要を、増大せしめる。機械の使用が全然廢止せられるならば、機械のおくり出される他の國がわれわれよりも安く賣ることができるようになるだけ、それだけ、製造の中止がすぐにおこるであらう。¹³⁾

と論じ、また、バーク氏も論じてつぎのごとくいう。

もしも、カートライト氏の工場壟斷が成功していたとすれば、多數の家族はそのためにパンが得られなくなつていたにちがいない。すくなくとも、氏があたらしい工場を建設することができたまでの相當長い間は。だから、それは、おそるべき困窮をもたらしにちがいない。¹⁴⁾

かくて、當時の識者達は「機械は有害どころか、労働者にとつても、また、社會全般にとつても有益であり」¹⁵⁾「ラッダイトの右の考えよりも」「もつと荒唐無稽な、根據のない議論を役立たすことは不可能であり」¹⁶⁾その「労働者自身にとつて有利なことは、もしかれらに事物を理解するための忍耐さえあつたならば、かれらに機械の偉大な效用を確信せしめたことであらう。しかるに、不幸にも、かれらはことなつた方向をとり、刑罰がともないはいはないかということばかりでなく、さらに、機械を使用してゐる工場の破壊がそこにはたらいいてゐるすべての人にもたらすにちがいない絶對的な貧乏、不幸、および困窮をも、考慮するために、たちどまらうとはしなかつた。もしもかれらがその考慮をしたならば、わたくしはおもう、道德的の義務でなくとも、世の常の慎重でも、かれらがその所業をなすことを、とめたことであらう」と、斷じてゐる。¹⁷⁾ラッダイツの當時、このような、みかたが、いかに、一般的であつたかは、ラッダイツにふかい同情をよせたバイロンさへ、ラッダイツの機械觀を無智と蒙昧の故に歸して、つぎのごとくいっているによつても、これを察することができよう。

うちですてられた労働者たちは、無智と盲目の故に、人類にとつて、かくも有益な技術上の改善を、よろこぶことをせず、かえつて、じぶんたちは、技術における改善の犧牲となつたとかんがえ、心性の暗愚の故に、勤勉なまづしきものの維持と厚生は、産業手段における改善——それは労働者を職から投げ出し、傭うにあたいせぬものといはしました——による小數者の致富より

も、より重大なことがらであると、かんがえたのであります。¹⁹⁾

かくて、ラディツ運動は、ふつうには、あわれむべき知性の貧困の露呈とみられ、ほろびゆくものの、はかない、あがきとられ、したがつて、それは、歴史の流れを逆におしかえさんとするものとかんがえられる。史上、ラディツ運動が、あまり重視せられぬのは、そのよつてきたところ、實にここにある。といつてよからう。

二

それでは、ラディツの機械観は、はたして、そのように、あやまれるものであらうか。上述の、機械は労働を排除せず、いな、むしろ、雇傭をもたらしさへする、というみかたは、それほど、つよいものであらうか。

機械は労働者を生活手段より遊離させることによつて、同時にこの生活手段を労働者を使用するための資本に轉化するといふ。しかしながら、ひるがえつてかんがうに、かれらは賃労働者である。かれらは、賃賃を使用者からうけとり、それをもつてこの生活手段を買つたものである。したがつて、この生活手段はかれらにとつて、資金としてではなく、商品として存在したのであり、かれら自身はこれらの商品にとつては、賃労働者としてではなく、買手として存在したのである。機械がかれらを生活手段から遊離させたという事情は、かれらを購買者から非購買者に顛落させる。そのことは生活手段（生活必需品）の需要減退、したがつて、その生産縮少、よつて機械が採用された生産部門のみでなく、採用されない部門においても、労働者を街頭に投げ出すことさえ、證明できる。¹⁹⁾

機械の採用は、機械製品のための労働者を必要とするといふ。だが、機械の製作が就業させる労働者は、機械の使用が驅逐する労働者よりもすくない。それは、解雇された労働者の勞賃額は、いまや、(1)機械の製作に必要な生

産手段の價值、(2)機械を製作する労働者の勞賃、(3)資本家の手に入る利潤を、表示する。さらに、機械はいわゆる固定資本である。永續性をもつ。したがつて、この機械製作に従事する労働者が永續的にその職にとどまりうるためには、その機械の採用が永續的に進行することを要し、そのためには、機械による労働者の追放が永續的に繼續せられねばならない。²⁰⁾

機械の採用が、低價を通じて、その生産を擴大し、雇傭の増大をもたらしという場合をみとめるとしても、そこには、熟練の不要により、女子、子供の登場する事實のあることを、みおとしてはならない。さらに、一産業部門から投げ出された労働者が他の部門において職をもとめる場合にはすくなくとも、つぎのごとき不利な條件があることをみおとしてはならない。まづ、かれの從來のスキルや經驗が高く評價されない。いな、場合によつては、マインスになることさへある。つぎに、一の職場を失つたものが、容易に他の職場に適應する保證が、かならずしもない。たとえば、筆耕が炭坑夫となることは困難であらう。さらに、一の生産部門における雇傭の縮減と他の生産部門における雇傭の増加の間における時間的ズレの可能性を考慮の外におくわけにはゆかないであらう。マルクスは「最初の犠牲者は過渡期のあいだに大部分は零落し、死滅するのである」とさへ、いつている。それに、その、他の生産部門でも、機械が採用されることがないという保證は、どこにもない。そこで、労働者の位置は、機械のために、きわめて、不安定なものとなることを、否定することができない。僕婢の職にいたつては、それが、かならずしも男子の本懐とするところではないこと、いうまでもないところであらう。

なお、機械の出現によつて、労働者の家族内の、女子、小兒も勞賃をかせぐことができるようになった、それは労働者にとつて有利である、機械が退場すれば、それらの、女子、小兒は勞賃をかせぐことができなくなる、それ

は労働者にとり不利である、という論は、はたして、どんなものであろうか。この場合、女子、小児の勞賃の取得は、從來の労働者の勞賃の喪失、または減少においてなりたつのではないか。一方の得は一方の失にはかならないしからば、かつては、労働者一人で維持できた家計が、いまや、一家總動員しなければ維持できなくなつたということにすぎない。それが機械の恩恵である、というのは、はたして、どんなものであろうか。

こうみてくると、ラディツの機械觀は、かならずしも、無智、無思慮より出づる謬見と、簡單にかたづけられるべきではないのではないか。なるほど、そこには、知性、思慮をみいだしたがたいかち知れない。そこにみいだされるものは、衝動的、本能的なものにすぎない、といひうるかも知れない。しかしながら、われわれは、そこに、それだからこそ、かれらが、身をもつて感ずる嗅覺をみうるのではなからうか。動物は危險に對して本能的、衝動的に身をまもる。ラディツの機械觀は、まさにそれに比することができのではなからうか。ゲーテは、「ウイルヘルム・マイステルの遍歴時代」の中で、製造業者の寡婦である「善良なる美人」(Die Gute-Söhne)につきのごとく述懐させている。

私の胸を壓へつけてをりますのは、商業上の或る心配なのでございます。次第に有勢になつてをります機械工業でございませう。夕立でもやつて來る様に、極くそろそろと遠方から鳴り響いて來てゐるのでございませうけれど、でももう其方向はきまつてをりますし、今にやつて來て入り込むのでございます。私の許婚の人も、しみじみ此事を思つて悲觀してをりました。それでいろいろ考へたり、話し合つてみたりするのでございませうけれど、考へ話ではどうにもなりませんものねえ。そして斯ういう怖ろしい事を、誰が好き好んでまざまざと思ひ浮べなんぞしましょう。まあ思つてみて下さいまし。山の間を谷が幾らもうねうねと

讀いてゐるでございましょう。あなたが退つておいでになつた通りですわ、そして此數日こゝう谷村でお目にとまつた嬉しい、可愛いくらしかたは、今だつてお目にちらつてをりますわね、それはおめかしをした娘達が昨日あんなに方々から集つて参りました事をお考えになつてみても、今の谷々の娛しくらしかたは、あくまで氣持好いものと、あなたにもお分りになりますわねえ。それなのに、どうでございましょう、それが次第々々に衰えて行つて、減んで行つて、數百年が間私達が棲み慣らして命づけて來た所が荒地となつてしまつて、大昔の様なひとつそりした所になつてしまつたら、まあどうでございましょう。²²⁾

それは、右の事情をうかがはしむるに足らないであらうか。そして、ラダイツ運動の時代を生きたりカードは、機械が勞働を排除することを、論證し、勞働者の機械に對する不満を肯定し、かつ、これをジャスチファイして機械の使用はしばかれらの利害に好ましくないという、勞働者階級によつて抱かれる意見は、偏見や誤りに基礎をおくものではなくして、政治經濟學の正確な諸原理に適合するものである。²³⁾

という。

三

しかるに、一八一六年一月コベットは、「ラダイツに與うるの書」(Letter to the Luddites)を發表している。それはつぎのごとくである。

機械は、もと、かならずしも、わるいものではない、ということを示すためには、われわれは、百人の人間よりなり、その家族は、みな、共同生活をいとなみ、その中の四人は手で布をつくることに従事している、族長種族(patritial race)を假定しさえすればよい。さて、たれかが機械を發明し、それによつて、必要な布のすべてが、一人によつてつくられうる、と假定せよ。

その結果は、その大家族は、（ほかのあらゆるものは充分にあるので）より多くの布を用ゐるということにならう。あるいは、もし、三人の布をつくる人たちの労働の一部が、他の部門で必要とせられるとすれば、それは、その他の部門で、用いられるであらう。かくて、余糧が、この發明のおかげをこうむるであらう。かれらは、自分たちの間に、より多くの布をもつであらう。あるいは、より多くの食料がつくられるであらう。あるいは、まえとおなじ量がつくられ、共同體には、研究、または、休息のため、より多くの閑暇がのこるであらう。一〇人のあわれな船員が、一袋の小麥と、わづかの亜麻とともに、無人島の岸に投げ出されたときよ。土地は肥沃である。魚もあれば果實もある。樹の枝や皮でかれらの家はできよう。そして、野獸はかれらの食事となる。だが、かれらは、なんとあわれな男たちであることよ。かれらは、小麥を蒔くこともできなければ、粉をつくることもできない。また、魚をとることもできなければ、獸をとることもできない。しかしながら、他の一艘の難波船をして、一箇の鯨と、一箇の鰐と、一箇の鰻と、一箇の斧と、一箇の鋸と、一箇の鋤と、一箇の鋤と、若干の釣り針と小刀とを岸に打ちあげさせよ。すると、なんととはやく、光景の一變することよ。しかも、なお、かれらは布を缺く。そして、たとえば、かれらのシャツをつくるためには、一〇人の中から、六人または七人が、常に亜麻布の生産に従事せねばならない。このことは、食料を供給せねばならない他の三人にとつて、おどろくべき負擔となる。だが、かれらに、一箇の織機をおくれば、七人の中の六人が、シャツをつくることから解放される。そして、安樂と豊富が、ただちに、これにともなう。この簡單な事例において、問題は、ただちに、機械に有利に決定される。²⁴⁾

そして、それは、かれらの、この本能的、衝動的な憎惡呪詛を拂拭し、それより生ずる機械への反抗を鎮靜せしめるにあづかつて大きな力があつた。龍騎兵の一箇連隊にまさる偉力を示したとさえいわれるくらいである。²⁵⁾ そのことは、コベットの意見が、かれらの胸裡の零線にふれて階層を奏したからでなければならぬ。コベットの意見がかれらを説得したからでなければならぬ。コベットの意見によつて、かれらが反省したことをものがたるもので

なければならぬ。みづから、みづからの非をみとめたことでなければならぬ。それでは、この、コベットの意見はただしのか。それはただし。うたがひもなく、ただし。まさに、そのとおりである。それを否定することはできない。われわれはそれを見とめねばならぬであらう。ラディツがこれに心服したとしても、それに、ふしぎはない、といえよう。しかしながら、そうだとすれば、機械は労働者に幸福をもたらさなければならぬはずである。しかるに實際は不幸をもたらした。それは、事實である。蔽うには、あまりに明白な、事實である。ここに問題がのこらねばならぬ。それでは、それはなぜであるか。

コベットは、機械をそれ自體においてとらえた。機械をそれが現實におかれてゐる周囲の條件からきりはなしてとらえた。機械をそれが現實におかれてゐる周囲の條件からきりはなして、それ自體においてとらへれば、機械は一の生産手段としてあらわれる。機械を一の生産手段としてみれば、それは、われわれを労働の苦痛より解放する。機械を一の生産手段としてみれば、それは、われわれに物質の豊富を約束する。かくて、機械を一の生産手段としてみれば、まことに、それは人類に幸福をもたらすはずである。それは、まさに、コベットのいうとおりである。しかしながら、それは、機械を、それが現實におかれてゐる、周囲の條件よりきりはなして、機械を、それ自體においてとらへたる場合のことである。しかるに、現實には、機械は、けつして、それ自體として存在しない。現實には、それは、一定の條件の下に存在する。そしてこの場合、それは、まづ、私有財産のよ、そ、お、い、の下にあらわれる。そして、そのために、労働者はその所有からきりはなされて、賃労働者としての自己をみいださねばならぬ。賃労働者は生きるために、その労働力を、商品として、賣らねばならぬ。賃労働者の賣る商品たる労働力を賣うものは機械の所有者である。かれは買つた商品、すなわち、労働力を機械と結合することにおいて生産をいとなむ。そ

れは賣るためである。自己の消費だけのためなら、機械の必要はないであらう。賣るのはもうけるためである。かくて、生産は商品生産であり、營利生産である。ここにおいて機械は單なる生産手段でなくて營利手段となる。生産手段が營利手段であるとき、これを資本とよぶとすれば、いまや、機械は資本である。機械は労働を節約する。機械が労働を節約するとき、機械が單なる生産手段であるならば、ほかの事情がひとしければ、労働時間の短縮となるであらう。そして、そうすれば、機械は人類を労働の苦痛より解放することになる。しかし、それが營利手段であり、資本である以上はそうはならない。そうはならないで、一方においては雇傭の減少となり、他方においては労働の強化となつて、あらはれる。あるものは失業せねばならない。のこるものも、従来どおりの労働時間から脱却することができない。いな、資本の回轉速度を促進し、その固定化を防ぐためより従来以上にさえならう。かててくわえて、機械は熟練、經驗を無價値にする。そのことは、この場合、労働力の供給を増大する。當然、勞賃は低下する。労働者の購買力は減少する。たとへ、機械の採用により、商品は安くなつて實質賃銀はあがるとしても、機械の採用によつて労働者の購買力が減少するのではなにもならない。いわんや、營利生産である。過剰生産の回避、獨占への進行がはかれよう。それは生産制限をとまひがちである。かくて、右の労働者の不利はいよいよますます。さらに、營利生産はコストの低減をもとめる。それは、資本の有機的構成の高度化、すなわち、機械化を進行せしめる。そのことは、右の労働者の不利を、ますます、ふかめる。かくて、われわれは、問題は機械自體にあるのではなくて、それが營利手段、資本である點にあるを知る。コベットの機械をそれ自體においてとらへた。機械を單なる生産手段においてみた。そのかぎりでは、かれのいうところはただしい。しかしながら、機械は現實には、資本としてあらわれている。資本としてあらわれている機械を、資本においてみず、單に生産手段

においてみたとともに、コベットの認識不足がなければならぬ。ことばをかえていへば、問題は、機械それ自体にあるのではない。それがおかれている條件にあるのである。條件を攻撃しないで、機械を攻撃するは非である。しかしながら、條件に眼を蔽うて、機械を禮讀するのも、おなじく、非でなければならぬであらう。

こうみてくるとき、わかくして逝つたブーツはえらかつたと、いわねばならない。ブーツはヨークシャー・ラディツの一方のリングリーダー、ジョージ・メラーの親友である。カートライト氏の工場襲撃において、惜しくもたおれた青年の一人である。オーエンの思想に傾倒していたといわれる青年である。かれは、かつて、ジョージ・メラーらに、つぎのごとく、かたつたと、つたえられている。

諸君、諸君が機械からこうむる害については、わたくしも、諸君と、まったく、同感である。そのことは、諸君も、よく、ご存じのとおりである。しかしながら、もし、社會の構造がちがつていたら、機械は人間の禍ではなくて、大きな福であつたらう。わが國も、他の國々も、すでに、機械のために、多くの人が、まつたく、はたらく意志はありながら、ここらならずも、はたらくことができないで、救助をうけるか、飢えるか、せねばならないような立場に、立たされている。それは、そのとおりである。だからといって、機械は、それ自体において、わるいものと、結論すべきであらうか？ 諸君がいまやっている、手でする切實が、けつして、なまやさしい仕事でないことは、諸君の、みな、よく、ご承知のところである。いな、われわれは、みな、手では、さみをあつかうことが、非常にくるしく、しまひには、手首がまがつてしまうことを、知っている。ところで、機械をみたまえ、勞働者に代つて、その仕事のもつとも困難なところを、いかに完全に、機械がすることよ。おかげで、諸君の仕事が、おもに、注意と用心 (care and watchfulness) になつたことは、おたがいのよく知るところである。諸君のために、これだけのことをしてくれることのできる機械が、それ自体において、わるいものだ、というのは、ばかげたことである。適當な状態の下にあれば、

機械は、ほとんど、まったく、祝福せられるべきものである。不幸にして、その、このましい状態が、存在していない。社會は、ことばの眞實の意味においては、肉體、知性、および、徳性の改善を、個人的に、また、集團的に、推進するための、多數人の結合を、意味する。もし、すべての、われわれの、資本と労働が、みな、――もし、資本家と數百萬人の労働者が、大都市をすてて、適當の大きさの共同體をもとめ、そのような共同體の必要とすることく、經濟的に、豊饒に従事し、全體の共同の利益のために、機械をつくり、機械をうごかすならば、この島々は、數年ならずして、まったく、ことなつた様相を呈し、貧困と飢餓は、まったく、そのあとをたつことでしょう。²⁷⁾

マルクスは、この點を、さらに、明確に、とらえて、つぎのごとく、いうている。

それ自體としてみられた機械裝置は、労働時間を短縮するが、資本主義的に使用されれば労働日を延長し、それ自體としては労働を軽減するが、資本主義的に使用されれば労働の強度を高め、それ自體としては自然力に對する人間の勝利であるが、資本主義的に使用されれば自然力によつて人間を壓服し、それ自體としては生産者の富を増すが、資本主義的に使用されれば生産者を貧民化する。²⁸⁾

クロボトキン (Peter Kropotkin) は、その、わかき日、かつて、王室の諸工場を見學した。そのときの感懷を、かれは、こうもらしている。

工場をたづねてから、わたくしは、強力で完全な機械がすきになつた。いかに、巨大なりで、小屋から出て、ネバ河にうかんでいる材木をつかんで、ひきこみ、のこぎりの下におき、のこぎりがそれを板にするか、あるいは、いかに、大きな、赤く熱した鐵の棒が、二つのシリンダーの間をぬけてから、レールに變形せられるか、をみて、わたくしは、機械の詩 (the poetry of machinery) を理解した。われわれの現在の工場においては、機械仕事は労働者にとつては殺人である。なぜなら、労働者は、あたえられたる機械に、終生の召使となり、それ以外のなにものでもないから。しかしながら、これはわるい組織の問題であつて、

機械それ自體のなんらあづかり知らぬところである。(But this is a matter of bad organization, and has nothing to do with the machine itself.) 過勞、終生の單調は仕事の手や道具でなされても、機械でなされても、そのわるいことに、かはりはしない。しかしながら、それはそれとして、わたくしは、人間が、かれの機械の偉力、その仕事の知的性格、その運動の優美、そのなすところの正確、の認識から得ることのできるよろこびを、よく理解する。²⁰⁾

そして、いま一つ。トルレルは、ジンミイをして、つぎのごとくいはしめる。

ジンミイ、「……そして、暴君である機械も、知能ある人間の征服するところとなれば、……諸君の道具となり、諸君の召使となる！」
ネッド・ラッド やさしく

「われわれの道具になる……」

ジンミイ、「もし、諸君が、マンメンのためにでなく、萬人のために、營利のためでなく、奉仕のために、生産につとめれば、どうか³⁰⁾ もし、一六時間でなくて、ただ八時間はたらくのだとすれば、どうか？ 機械は、もはや、諸君の仇敵ではなく、援助者だ！」

かくて、ラダイツは、パーク氏やバイコン卿等の非難する意味では、かならずしも、過誤を犯したものとはいえない。しかしながら、ラダイツは過誤を犯したとはいわねばならない。(一)ブーツの意見をきかず、條件を攻撃せずして、機械それ自體を攻撃したことにおいて、(二)コベットの意見にしたがい、條件に眼をふさいで、機械それ自體を肯定したことにおいて。要するに機械それ自體と、その條件、いいかえれば機械それ自體とその利用形態、さらに、ことばをかえていへば、機械の本質とその現象形態、の混同、すくなくとも、その認識不足、まことに、この點にこそ、かれらの迷妄があつた、というる。しかしながら、かれらの過誤を責め、迷妄をわらうは、いささ

か、酷に失するのそしりをまぬがれぬであろう。「労働者が機械装置をその資本主義的使用から區別し、したがって、彼の攻撃を物的生産手段そのものからその社會的利用形態に轉ずることを知るまでには、時間と經驗が必要だつたのである」³¹⁾から。

ネッド・ラッド、

「他の人々があとより來るであろう……」

われわれよりも、もつと學識があり、もつと信念に富み、もつと勇敢な！

そして、眞の敵とたたかうであろう。

そして、かれを壓服するであろう。」

—トルレー²²⁾—

- (1) Ernst Toller, Die Maschinenstürmer, V. iii, S. 117.
- (2) 補償説ならびに解放説に關しては戸田武雄教授の「機械の經濟學」(昭和十二年)柴田敬博士の「理論經濟學」上(昭和十一年)二、第二章第三節註17等、又ハ本稿註(參照)。
- (3) Karl Marx, Das Kapital, S. 408—向坂逸郎譯、第一卷・第三分冊、二二三頁以下。
- (4) Ibid, S. 404. 向坂逸郎譯、同上、二三四頁。
- (5) J. S. Mill, Principles of Political Economy, edited by W. J. Ashley, pp. 96—97.
- (6) Th. Lebrun, Livre de Lecture Courante contenant La Plupart des Nations Utiles qui sont a la portée des enfans de 8 a 12 ans, Paris, 1878, Seconde Partie, pp. 81—82.
- (7) Karl Marx, Ibid, SS. 408—409. 向坂逸郎譯、同上、二三〇—二三三頁。
- (8) Ibid, SS. 409—410. 向坂逸郎譯、同上、二三三頁。

(9) Ibid., S. 411. 向坂逸郎譯、同上、二三五頁。

(11) Ibid., S. 411. 向坂逸郎譯、同上、二三六頁。

(12) Ibid., p. 2. (14) Ibid., p. 135.

(10) Ibid., p. 135. (17) Ibid., p. 135.

(18) Lord Byron's Speech in the House of Lords on the Second Reading of the Frame-Work Bill, 27th February, 1812; (The Machine-Wreckers, by Ernst Toller, English Version by Ashley Dukes, Appendix p. 107.)

(19) Karl Marx, *ibid.*, S. 405. 向坂逸郎譯、同上、二二六—二二七頁。

(20) Ibid., S. 404. 向坂逸郎譯、同上、二二四頁。K. Marx, Theorien über den Mehrwert, Bd. II, II, Teil SS. 339—346.

(21) Ibid., S. 406. 向坂逸郎譯、同上、二二七頁。

(22) Goethe's Werke, 1855, (J. G. Cotta'scher Verlag) Band 19, S. 148.

(23) D. Ricardo, On the Principles of Political Economy and Taxation, edited by E. C. K. Gonner, p. 383, 小泉信三譯、二八八—二九頁。この點については大阪市大助教授眞實一男氏の詳細な研究『ベートン、およびカドワの「機械論」について』（經濟學と經濟、五八・五九・六〇號連載）がある。

(24) F. Peel *ibid.*, pp. 281—282. (25) H. Martineau, Thirty Years' Peace, Vol. I, p. 75. (26) F. Peel, *ibid.*, p. 15.

(27) Ibid., pp. 17—18. (28) Karl Marx, *ibid.*, S. 407. 向坂逸郎譯、同上、二二八—二二九頁。

(29) Peter Kropotkin, Memoirs of a Revolutionist, (Boston and New York, Houghton Mifflin Company, The Riverside Press Cambridge) 12th Impression, pp. 118—119.

(30) Ernst Toller, *ibid.*, II, ii, S. 45. ただし、トラーの原文に、

“Denkt, wenn ihr einzig schafft, was ihr braucht, nicht Zweckdienst, Zinsdienst leistet Moloch Mammon.”

とあるところは、アシエンイの英譯によつた。アシエンイの英譯は原文を超越している。ここに、原文を附して、そのおねをいさへておく所以。

(31) Karl Marx, *ibid.*, S. 394. 向坂逸郎譯、同上、二〇五頁。

(32) Ernst Toller, *ibid.*, V. iii, S. 121.